

「組合が水泡に帰したのは当局のせい」

「企業一組合の失敗にあえぐ松崎」



1988.11.24
No.2930

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五〇六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

七月（松崎講演）に次ぐ二度の大破産

十一月五日、JR千葉支社と東鉄労千葉地本との共催で開かれた革マル松崎と松田JR東日本常務の「講演会」は管理者を中心に五〇〇名を目標（しかも「義務」参加）にしたが実際は三分の一以上が欠席し三〇〇名余りしか集まらず惨めに大破産した。

七月（五〇名しか集まらず）の失敗をとりもどそうと、今回は当局と共催にしたものの「松崎の話しは聞きたくない」と公然と出席を拒否する者が続出してしまった。意気消沈した松崎は急拠、講演予定さえ変更、しかも内容たるや支離滅裂、前代未聞の大乱調で、会場は完全にシラケ切ってしまった、最後には「経営陣の皆様の前で失礼しました」と謝罪するありさまであり、重くるしい雰囲気にかねてそくさと帰ってしまおうという惨状を呈したのである。

当局に泣きつく松崎

松崎の講演の特徴は、彼ら革マル特有の責任のなすりつけと弁明と泣訴、歯の浮くような経営陣讃美、そして威嚇（全く無力な）に終始するものであった。

結局、言わんとしていることは、「当局はもっと俺達に顔をむけてくれ」「俺たちを守ってくれ」「そのためには召使いでもなんでもやる」という腐りきった自己宣伝以外のなにもでもないのだ。（以下、発言の一部を怒りをこめて紹介する）

①責任転嫁 九月三十日、盛岡集会でも言及しているが、「一企業一組合は水泡に帰した」「責任は経営陣にある」として「もっと強腰でやれ」とけしかけている。

又、革マルのモデル地域といわれている高崎支社の事故多発について「上越線の事故はJR東日本本體の問題だ」と平き直っている。

人命の安全よりも「会社の黒字経営」を叫んでいるのは松崎・鉄道労連であり、それをいいことにして小集団活動やプラスチックにかりたて、安全をそつちのけで労働強化をおしつけている当局、こうした体質こそが事故の根本原因なのだ。まさに、盗人たけだけしいとは革マルのことである。

②当局への泣訴と歯の浮く讃辞

平き直りの次は、一転して泣き落してある。松崎曰く「本社の多くの経営陣は優れている。ぬくもりをもっている」「黒字にしようという人達で二人三脚を組もう」「能力の差は東鉄労は首脳陣の足もとにも及びません」「俺は会社のためになり仕事をしている」「組合（幹部）は会社の召使いです」と。会場は完全にシラケる。何をか言わんやであろう！

③居直りと威嚇

シラケ切った雰囲気にあせった松崎は、最後には当局への忠誠心をだめおしの語り、あとは居直りと威嚇、スゴンで見せるのである。曰く「労使協調の旗頭といたい奴は、その通りだから言っても構わない」「ところでストライキは権利：俺だつて場合によってはすごい力を発揮するからね」（笑止千万）さらに続ける「動労千葉はまだ存在しているんですか」などと無視のポーズをとろうとするが感情が先走ってしまい百分以上もしゃべり、しまいには「動労千葉は汚ない」「経営陣はなんとかして下さい」と哀願する始末である。この松崎の錯乱状態こそ、鉄道労連の絶対的危機の反映そのものであろう。

清算事業団の仲間の切り捨てを
叫ぶ東鉄労を許すな！

絶対許せないことに、松崎は「清算事業団の職員を採用しろと要求しているが、あんな連中になんで人件費を払う必要があるのか」と憎しみをこめて「今すぐ切り捨てろ」と強調している点である。

人を人と見ない、自分らだけ良ければ他の者はどうでもよいとする松崎革マル・鉄道労連に激しい怒りをおぼえる。

清算事業団の仲間、被解雇者を包み、怒りも新たに、鉄道労連解体・一掃をとことん進めることを勝利の核心でもある。

明日(11/25) 午後7時30分
本千葉駅
木戸君脱退強要事件
地労委闘争 千葉地方労
いよいよ
本人が証言。